

吉良御鷹場 — 家康も訪れた鷹狩の聖地 —

令和5年7月15日（土）～9月3日（日）



「名所江戸百景」(深川御嶽十万坪)(部分)
法政大学蔵・西尾市教育委員会蔵

一色学びの館企画展
令和5年
7/15 [土] ▶ 9/3 [日]
西尾市立一色学びの館 多目的室
愛知県西尾市一色町一色東前新田8
開館時間 / 午前9時～午後7時
休館日 / 月曜日【7月17日(祝)は開館】

観覧無料

— 家康も訪れた鷹狩の聖地 —
吉良御鷹場

主催 / 西尾市立一色学びの館 協力 / 諏訪流放鷹術保存会

鷹狩は、古代では天皇や貴族の遊びとして、中世では武士のたしなみとして古くから行われ、江戸時代には年中行事の一つとなりました。

また、今年の大河ドラマの主人公として注目を集めている家康は、鷹狩好きとして知られ、西尾にも鷹狩で訪れています。

当時の西尾は、矢作古川の下流一帯に河原や沼、湿田など自然の原野が広がる鳥獣の繁殖地で、鷹狩に適した土地でした。そのため、家康の他に、織田信長、豊臣秀吉も鷹狩のために何度も西尾へ訪れています。

本展では鷹狩の歴史や作法、西尾で鷹狩が行われた背景について紹介します。

令和5年7月 西尾市立一色学びの館

第1章 鷹狩の歴史

鷹狩は訓練したタカを山野に放って鳥や獣を捕まえる狩りのことで、5,000年以上前のアジアの遊牧民によって生み出されたと考えられています。鷹狩は世界各国に広まり、現在ではアラブ首長国連邦をはじめとした11か国の鷹狩がユネスコの無形文化遺産に指定されています。

日本の鷹狩は3世紀ごろ、仁徳天皇に珍しい鳥が献上され、それを百済系渡来人が調教し、狩りを行わせたことがはじまりだと『日本書紀』に記されています。仁徳天皇はこの出来事の後には鷹甘部を定め、大宝律令後には鷹甘部を受け継ぐ形で主鷹司が置かれました。鷹狩は権力を示す儀式でもあり、天皇や公家に親しまれました。

鷹狩は獲物を追い立てる人々への指示など、軍事演習としての性格も備えており、武士の基礎的な素養として、中世になるとしだいに武士の間でも広く行われるようになります。室町時代になると武士の鷹狩は一層活発になり、タカや鷹狩の獲物は贈答品にもなりました。また、戦国大名は権力の象徴として、自身の領国での鷹の権利を独占するようになります。

江戸幕府の初代将軍・徳川家康は鷹狩を好んでいたことで有名で、江戸時代になっても行われました。鷹狩は儀式化されて江戸幕府の年中行事となり、特に将軍自らが行う「鶴御成」は最も権威のある鷹狩でした。生類憐みの令を出したことで有名な五代将軍・徳川綱吉が鷹狩を縮小しましたが、八代将軍に徳川吉宗が就くと、鷹狩は再興することになります。

鷹書とは

鷹書はタカを調教して獲物をとらせる技術に関する知識を記した書物のことで、古いものでは平安時代初期まで遡ります。その内容は鷹狩の歴史からタカの種類、タカの育て方や治療法、鷹匠の装束や鷹場での作法など多岐にわたります。



名所江戸百景（箕輪金杉三河しま）

法蔵尼寺蔵／画像提供＝西尾市教育委員会
鷹狩をするために定められた場所のことを「鷹場」とよびます。鷹場に指定された地域では、獲物になるツルやカモはもちろん、タカのエサとなる小鳥もとることを禁止されていました。



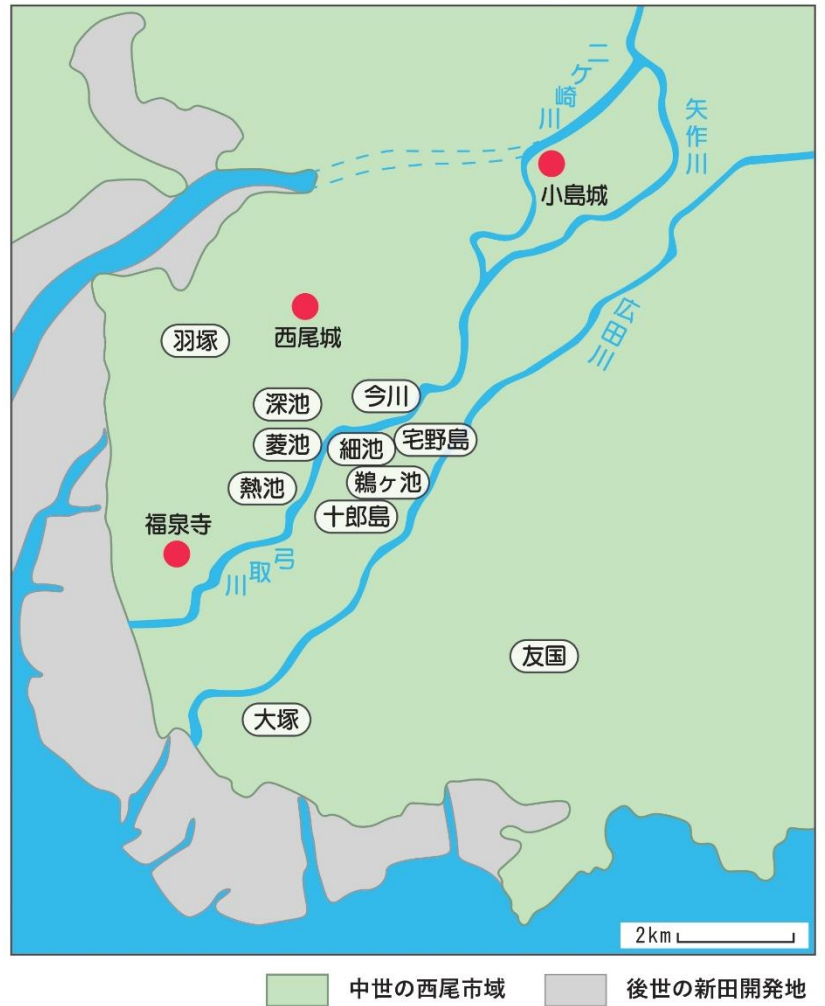
『新修鷹経』国立公文書館蔵

第2章 西尾の鷹狩

中世の西尾市内には、広田川や弓取川などの川が流れていました。特に、矢作古川下流一帯は、河原・沼沢・湿田など自然の原野が広がり、福地地区の地名からも水が豊かな土地であったことが分かります。水場の周りには鷹狩の獲物となる鳥獣が多く棲んでいたと考えられ、織田信長や豊臣秀吉、徳川家康も鷹狩のために西尾を訪れています。

慶長10年に矢作川の改修が行われ、現在の本流になります。正保3年に弓取川が閉じられると湿地は農地に代わり、しだいに鷹狩は行われなくなっていきます。

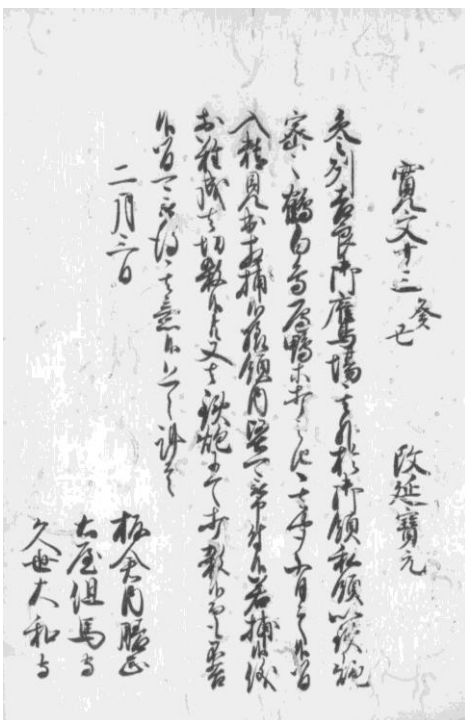
中世の西尾の地形 ※『新編西尾市史 通史編1』P.519を元に作成



被仰出留 (国立公文書館蔵) /明暦3年～延宝7年

参州吉良御鷹場、其外於御領私領、以鉄炮密々鶴・白鳥・鳶・鴨等打其由、其間有之候間、入精見出、相捕候様領内堅可被申付候、若捕候儀於難成者切殺候共、又者鉄炮にて打殺候而も不苦候間、可被得其意候、恐々謹言

寛文13年に三河国内の領主に出された命令です。吉良御鷹場やその周辺で鉄砲を使った鳥の密猟が横行しているため、その発見と捕縛を徹底するよう命じており、江戸時代初期の西尾に幕府の鷹場があったことが分かります。また、密猟者を捕まえるのが難しい場合は殺してしまっても良いとも書かれており、鷹場を管理する幕府の強気な姿勢をうかがうことができます。



永禄3年	1560年	5月	桶狭間の戦い
7年	1564年		三河一向一揆を平定
8年	1565年		家康が鷹狩の際、富永忠安に引見・仕官を勧める。忠康はこれを固辞し、妙満寺を建立する。
9年	1566年	12月	松平家康が徳川に改姓して、三河守になる。
天正2年	1574年	閏11月	信長が家康に対して吉良で鷹狩を行う希望を申し入れ、家康も歓待の意志を伝える。
3年	1575年	5月	長篠の戦い
		11月	信長が家康に岩村城を落城させたことを伝え、吉良で鷹狩と会見をすることを申し入れる。
4年	1576年	12月	信長が家康と吉良で鷹狩を行い、西尾城本丸の井戸を使用する。
5年	1577年	11月	松平家忠が永良郷で鷹狩を行う。
		12月	信長が吉良で鷹狩を行う。
6年	1578年	1月	信長が吉良で鷹狩を行う。
7年	1579年	1月	家康が吉良で鷹狩を行う。ついで松平家忠が鷹狩見舞として吉良大塚に赴く。
8年	1580年	1月	家康が吉良で鷹狩を行う。
10年	1582年	6月	本能寺の変
11年	1583年	1月	家康が吉良で鷹狩を行う。
12年	1584年	3月	小牧・長久手の戦い
	1584年	12月	信長の次男・信雄が吉良で鷹狩を行う。
13年	1585年	11月	家康が西尾を訪れ、鷹狩を行ったか。
14年	1586年	12月	家康の鷹師衆が西尾を出て浜松に帰る。
15年	1587年	12月	家康が西尾で鷹狩を行う。
16年	1588年	12月	家康が吉良で鷹狩を行う。
17年	1589年	11月	秀吉の吉良での鷹狩に備えて、家康が上洛を遅らせる。
18年	1590年	8月	秀吉が全国統一する。 家康が関東に移る。
19年	1591年	閏1月	秀吉が吉良で鷹狩を行う。
		2月	家康のもとで鳥見役を務めていた伊藤正知が秀吉に召し抱えられる。
		8月	伊藤正知が吉良鷹場の鷹羽奉行を任せられる。
		11月	秀吉が吉良で鷹狩（大鷹野）を行う。
文禄2年	1593年	11月	秀吉が吉良で鷹狩を行う。
慶長3年	1598年	8月	秀吉死去
5年	1600年	9月	関ヶ原の戦い
13年	1608年		家康が吉良で鷹狩を行う。
17年	1612年	1月	家康が吉良で鷹狩を行う。
20年	1615年	1月	家康が吉良で鷹狩を行う。
21年	1616年	4月	家康死去
寛永10年ごろ	1643年ごろ		手鷹師頭・阿部重次が鷹場の管理のため、江戸から吉良を訪れる。
寛文13年	1673年		幕府老中が吉良地域の領主に、吉良御鷹場での密猟者の発見と捕獲を命じる。

市内の鷹狩ゆかりの地

西尾城（錦城町）

西尾城の本丸にある井戸には、織田信長が鷹狩のときに使用したものだという伝承が残っています。



妙満寺（大給町）

妙満寺を建立した富永忠安は藤波暇の戦いで有名な富永伴五郎の父親で、吉良氏滅亡後は鶴ヶ池に隠居しました。永禄8年、家康が鷹狩の接待と仕官を勧めましたが、これを断り、一族を弔うために寺を建てることを願い出ます。家康はこれを許し、当寺が建てられたといひます。当初は鶴ヶ池に建てられましたが、現在は大給町に移転しています。

三英傑の鷹狩

織田信長

信長は、家康の領国・三河にたびたび鷹狩のため訪れています。三河での鷹狩は同盟関係であった織田氏と徳川氏の友好を演出する意図もありました。

天正3年、信長は吉良で鷹狩を行いたいことを家康に伝えています。これは、長篠の戦いで武田氏という共通の敵を倒した織田氏と徳川氏が鷹狩を口実に、友好関係を再確認するためのものでした。

また天正6年の鷹狩で、信長は岡崎城にも訪れています。当時の岡崎城主・信康（家康の長男）とその妻・五徳（信長の娘）の仲を取り持ち、信康夫婦や孫たちと交流することで徳川氏との友好関係を次世代にも継続していきたい意図があったのだと考えられます。

しかし天正7年に信康が粛清され、織田・徳川氏の婚姻関係がなくなると、吉良における友好関係の演出も見直されることになり、信長が鷹狩のため吉良を訪れることはなくなりました。

小島城（小島町）

かつて西尾にあった中世城館です。城主・鷹部屋銚之助は荒川氏に仕え、享禄2年に松平清康に城を攻められた際、城の背後にある矢作川に飛び込んで荒川城まで逃げ延びたといわれています。鷹狩のタカを飼育するためのタカ専用の小屋を「鷹部屋」とよぶことから、鷹部屋氏もタカと関わりのある一族だったのかもしれませんが。

家康鷹野陣跡（行用町）

福泉寺（行用町）の寺伝によると、当時の住職が家康に助力したため、近辺に寺領を受けたとされています。境内には家康がこの地で鷹狩をした際の本陣を当寺に置いたことを伝える石碑が立っています。

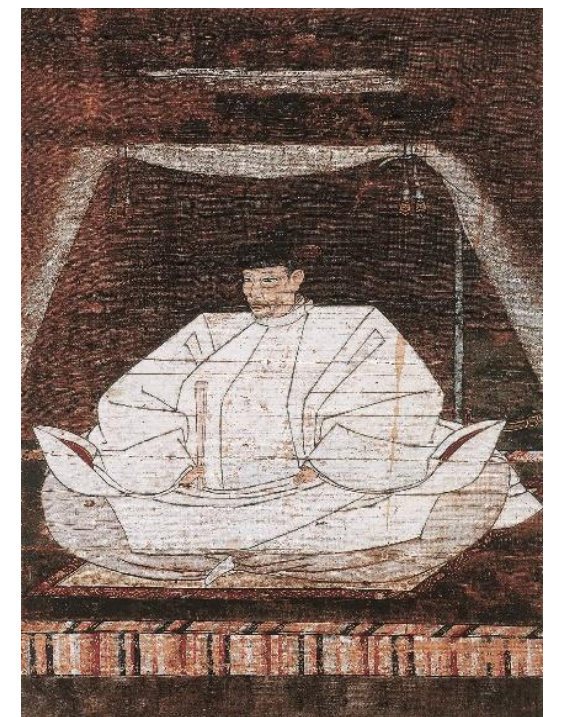


豊臣秀吉

秀吉も何度か西尾で鷹狩を行っており、特に、天下統一後の天正19年11月に吉良を中心に行われた尾張・三河の鷹狩は、大規模なものでした。都に戻ると数多くの獲物をたずさえた盛大な行列を行い、公家をはじめ町人にも獲物を分け与えました。

「大鷹野」とよばれたこの鷹狩が行われた背景には、秀吉の養子・秀次の存在がありました。同年8月に秀吉の長男である鶴松が亡くなり、秀次が家督を継ぐこととなります。鷹狩と同じ時期に尾張で家督を譲っていることから、「大鷹野」は秀吉から秀次への代替わりを全国に発信するためのパフォーマンスだったと考えられます。

また、もともと家康の領地だった三河と尾張で鷹狩を行うことで家康を制する目的もあったとも考えられ、家康は秀吉の鷹匠にこの鷹狩の様子について手紙でたずねています。



「豊臣秀吉画像」佐賀県立名護屋城博物館蔵

徳川家康

家康の鷹狩好きは有名で、10歳のころにはすでにタカを使っていたといわれています。浜松や駿府を本拠にしていた時期でも岡崎城を訪れた際にはしばしば吉良へ足をのびし、鷹狩を行っています。

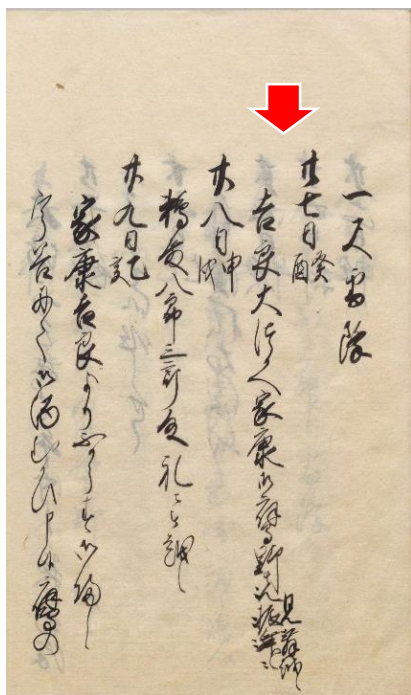
鷹狩でとれた獲物を家臣に下げ渡すこともありました。深溝（幸田町）の領主であった松平家忠は、吉良の鷹狩の接待をした際にガンを与えられたことを日記に残しています。

家康は亡くなる1年前、大坂冬の陣の翌年、慶長20年には大坂から駿府へ帰る道中、各地で鷹狩を行っています。吉良にも訪れ、ツルやガンをとり、風雨で狩りができない時は従者と鷹狩談義をして過ごしました。



徳川家康公之像

画像提供=静岡市オープンデータポータルサイト



家忠日記（国立公文書館蔵）/天正5年～文禄3年

廿七日^{癸酉}

吉良大つかへ家康御鷹御越候、

松平家忠（1555～1600）は深溝城（幸田町）の城主で、徳川家康に仕えました。家忠が記した日記には、家康の鷹狩の獲物を下賜されたり、逃げてしまった家康のタカを吉良で捕まえて岡崎まで届けたりなど、鷹狩に関する出来事も多く記されています。

また、家忠自身も永良郷に鷹場を持っており、鷹狩を行っています。

鷹場の管理人 鳥見役人

鷹場の管理は鳥見役人とよばれる役人が行っていました。鳥見役人は、日ごろは草を刈ったり、獲物に餌付けしたり、獲物を襲うイヌやネコを駆除したりして、獲物が繁殖しやすい環境を作っていました。そして、鷹狩が行われるときは獵場一带の見張や案内役を務めました。鳥見役人にはその土地や鳥に詳しい人物が選ばれ、吉良御鷹場では伊藤正知が鳥見役を務めました。正知は家康に仕え、家康が関東に移封されると秀吉に召し抱えられることとなります。秀吉が亡くなった後は再び家康に仕えました。

第3章 現在の鷹狩の技術

鷹狩に使うタカを持ち主（鷹主）のかわりに調教し、毎日の世話をする人を鷹匠とよびます。中世になると調教により高度な技術が必要となり、さまざまな流派が生まれました。

「諏訪流」は中世から近世において全国でもっとも普及した流派の一つです。諏訪大社（長野県）で行われた、タカで捕らえた獲物を神に供える「贄鷹」という神事がはじまりだといわれています。諏訪大社は東日本を代表する神社の一つであり、軍神が祀られていることから武士たちの崇敬を受けており、鎌倉幕府が鷹狩を禁止する際も諏訪神社の贄鷹は例外として認められていたため、諏訪流は全国に広まりました。諏訪流の祖である小林家次は、戦国時代から江戸時代初めごろに活躍した鷹匠です。織田信長に仕え、鷹狩の功績から鷹の字をもらい、家鷹と名乗るようになります。信長が没したあとは豊臣秀吉・秀頼に仕え、次男・元長が徳川家康に召し抱えられると、子孫は幕末まで徳川将軍家に仕えることとなります。

明治時代になると、諏訪流は宮内省に仕えることとなり、皇室の儀式として鴨場で鷹狩を行いました。戦後、鷹狩が行われなくなると、伝統的な鷹狩の技術を伝承するため、第17代宗家の田籠善次郎氏らが諏訪流放鷹術保存会を発足し、現在も活動しています。



諏訪流の鷹装束

画像提供＝諏訪流放鷹術保存会
明治から大正時代に宮内省で採用されたものを基に作られています。江戸時代の装束との違いは、藁の編み上げ靴や草履が地下足袋に、頭巾が鳥打帽に変わった点だけです。



浜離宮恩賜庭園での鷹狩実演会
画像提供＝諏訪流放鷹術保存会

大名たちの鷹狩を支えた鷹匠の技は、現代ではカラスやハトなどの害鳥駆除、飛行場でのバードストライクの防止などで生かされ、わたしたちの暮らしに役立っています。

また、初心者でも飼育や調教が容易なハリスホークの流行や、海外の安価な鷹道具の輸入により、ペットとしてタカを飼う人が増える一方で、日本の伝統的な鷹狩文化が廃れつつあります。日本の鷹狩文化を後世に受け継ぐため、諏訪流放鷹術保存会などを中心に、門下生への講習、イベントでの講演や実演、里山や資料の保存など多岐にわたる活動が行われています。

令和5年度 一色学びの館企画展「吉良御鷹場」展示資料目録

No.	資料名	年代	数量	所蔵
1	剥製 オオタカ	現代	1点	倉内求明氏
2	剥製 キジ	現代	1点	倉内求明氏
3	新修鷹経	近世中期写	1冊	西尾市岩瀬文庫
4	絵本鷹かゝみ	明治刊行	5冊	西尾市岩瀬文庫
5	名所江戸百景	安政3~5年 (1856~1858)刊行	1冊	法蔵尼寺蔵/ 西尾市教育委員会寄託
6	料理物語	寛永20年(1643)	1冊	西尾市岩瀬文庫
7	<懐玉>三河州地理図鑑	寛保元年(1741)	1舗	西尾市岩瀬文庫
8	西尾草創伝	近世後期写	1冊	西尾市岩瀬文庫
9	西尾郷村雑書	昭和2年(1927)写	1冊	西尾市岩瀬文庫
10	被仰出留(複製)	明暦3年~延宝7年 (1657~1679)	1冊	-
11	家忠日記(複製)	天正5年~文禄3年 (1577~1594)	1冊	-
12	剥製 キジ	現代	1点	倉内求明氏
13	鷹口伝・鷹之秘書	明和8年(1771)	2冊	西尾市岩瀬文庫
14	鷹野の図	元禄7年(1694)写	1冊	西尾市岩瀬文庫
15	鷹秘抄・鷹間書条々・鷹事	明和8年(1771)写	1軸	西尾市岩瀬文庫
16	鷹之書	寛政5年(1793)写	1冊	西尾市岩瀬文庫
17	鳥類写生	近世後期写	1冊	西尾市岩瀬文庫
18	百鳥写真	幕末ごろ写	3冊	西尾市岩瀬文庫
19	大緒	現代	1点	諏訪流放鷹術保存会
20	口餌籠	現代	1点	諏訪流放鷹術保存会
21	忍縄	現代	1点	諏訪流放鷹術保存会
22	鳩袋	現代	1点	諏訪流放鷹術保存会
23	鞆	現代	1点	諏訪流放鷹術保存会
24	鷹鈴	現代	1点	諏訪流放鷹術保存会
25	鈴板	現代	1点	諏訪流放鷹術保存会
26	策	現代	1点	諏訪流放鷹術保存会
27	剥製 カモ	現代	1点	倉内求明氏
28	剥製 カモ	現代	1点	倉内求明氏
29	秘伝千羽鶴折形	寛政9年(1797)	1冊	西尾市岩瀬文庫

アンケート→

企画・運営の参考にさせていただきますので、みなさまのご協力をお願いいたします。

